香 川 大 学 経 済 論 叢
第93巻 第4号 2021年3月　1－16

台湾の地方青少年出版物

―― 民國70年前後の『南市青年』とその編集 ――

髙　橋　明　郎

0　導　　言

戦後の台湾で，国民党政府は青少年の教育について多大の神経を使ってきた。民國80年代まで，次第に統制されていった国語政策，そして民族意識教育の強化，政治思想の刷り込みといった諸事項は，学校と言う場を利用することで有効に浸透させることができた。もちろん教科教育は基幹であるが，その他学校での様々な行事･活動も重要な手段であった。文芸活動の衣を纏った出版物も，思想強化・統制の重要な手段の一つであるという立場で，筆者はこれまで幾つかの青少年出版物について調査・分析を行ってきた。

即ち，救国団系統の全国版中学生向け雑誌『幼獅少年』，救国団地方支部発行の『南市青年』，『南縣青年』，国民中学の校刊『善中少年』，高級中学の校刊『南一中青年』である。いずれも，1970年前後まで，つまり蔣介石政権から蔣経國政権に変化する時期を中心に，その時期の政策との関連を考えたものである。(1)

今回は，この混乱期の後雑誌がどう変化したかを考えることを目標に，まず，

（1）「『幼獅少年』創刊の時代」（『香川大学経済論叢』vol. 84-4，2012. 3）「『幼獅少年』創刊期の記事と作家たち」（『香川大学経済論叢』vol. 85-4，2013. 3）「『幼獅少年』創刊の時代－『幼獅少年』初期の編集」（香川大学経済論叢』vol. 86-4，2014. 3）「台湾の政治・社会と少年雑誌編集～民國65～70年代の『幼獅少年』を例に（第一部）」（香川大学経済論叢』vol. 87-4，2015. 3）「台湾の地方青少年出版物の機能－『南市青年』と政治記事（『香川大学経済学部研究年報56』2017. 3）「戦後台湾の青少年出版物の研究－初期の『南一中青年』の状況について－」（『香川大学経済論叢』vol. 91-4，2019. 3）「戦後台湾の青少年出版物　台南地区の國中校刊を例に」（『香川大学経済論叢』vol. 92-4，2020. 3）

前回扱った時期の後，民國 69～70 年（1980～1981）の『南市青年』を材料とする。

この時期，発行者は，まだ創刊期と同じ倪超，南市青年期刊社の社長は甯經綸，総編集楊鴻志，編集長が劉希聖・李佩華という体制であった。

1　記　　事

まず，この期間の誌面がどのような内容のものであったか，文芸作品以外の部分を見てゆこう。

1.1.　時事系記事

1.1.1.　蔣家関連

民國 69 年 3 月 31 日に中正紀念堂が完成した。葬儀などを除けば，蔣介石関係では没後最大のイベントとも言え，4 月発行の 42 号裏表紙に中正紀念堂の写真が配され，紀念堂の解説記事が示されたのは当然と言える。

故蔣介石については，45 号以降「蔣公嘉言」が毎号裏表紙などに置かれる構成になっているが，1 ページ分のスペースを取りながらも，必ずしも量的にそこを埋めるほどの引用ではない。

一方，蔣経國総統については，時に文章が引かれる形態になっている。

42 号巻頭の文は蔣経國（目次では「蔣総統」）の「回顧苦難而充満希望的五年」が転載されている。この中では，共産主義が力を強めつつある情勢の中，父蔣介石の遺訓に従って進むべきことが述べられる。また，この 5 年間，米国との断交以降でも，中華民國は揺るがなかったと強調する。[(2)] そして，挫折しなかったのは「民族の底力」のせいであると述べる。また，大陸の状況については，奴隷生活で衣食にも切符が必要な不自由さを描く。[(3)]

次に登場するのは 11 月で，47 号に「創造機會」，続いて 1 月の 48 号「不怕苦，不怕痛」3 月の 49 号「鐵函心史」（いずれも「小故事大道理」）が引かれて

（2）「…當美國背信毀約，承認共匪的時候，大家固然恥痛切心，但一樣無畏無懼，團結奮起…」（『南市青年』42 号，P. 6）

いる。

蔣介石－蔣経國の流れを当然のものと捉えさせようと，写真・記事を駆使した初期の編集に比べると，その重みは減じているが，蔣介石父子が通例のように読者の前に現れることは変わっていない。

42 号の巻頭詩は国軍詩隊伍隊長だった羊令野（本名黄仲琮，当時は既に退役）が，蔣介石の墓所である慈湖を詠んだ「慈湖頌」という長大な詩が見開きで引用される。「蔣公，蔣公，您…」と蔣介石を二人称で何度も呼びかける詩である。(4)

実際，救国団の活動としては，4 月の蔣公逝世の紀念行事（於成功大学中正堂），11 月には蔣介石生誕記念のスピーチコンテストなど，節目の行事は行われている。

42 号は成功大学附属工業の陳雅静による「恭讀“守父靈一月記”」，成功中学･石紀嵐の教孝月に関する作文と並んでいるが，こうしたものは，まだ校内，社会でこうしたコンクールが続いたことを示している。

当時の国民党政権下では，中国青年写作協会が主催して，例えば「青年節文藝徵文」のような活動が行われており，蔣介石逝去や新総統の誕生などの節目でも同様に，全国規模のこうした活動が上部にあり，各級学校や地方誌での類似の作文コンクールでそれはより広汎に行われ，政権のメッセージが伝わる裾野を広げる効果が有った筈である。

（3）「大陸同胞畫地為牢的奴役生活，和越南難民椎心泣血的海上漂流，對任何有血性的人，都是一種沉重的精神責任。…共匪有過一時一刻，放棄過它所謂“解放”和“統一”的企圖嗎？　它的“解放”和“統一”，是什麼意思？　是折散家庭，禁治產業，出門要路條，吃飯要糧票，穿衣要布票，是要把千千萬萬的人，改造成千千萬萬終年蒙上眼罩，為他流血流汗永無休止的奴隸牛馬，而“統一”於它的箝制恐怖之下，大家更不妨再想一想，共匪挑撥分化滲透顛覆的伎倆。」（『南市青年』42 号，P. 7）

（4）「…蔣公，蔣公，您的英靈永遠庇護著我們。…五十年前　您傳遞著　國父的主義明燈，今天我們秉承　您的革命衣鉢邁進。學習您　不憂不懼不惑的精神，景行您　大智大仁大勇的典型。我們緊握住，您手授的智慧寶劍，就能戰勝最邪惡的敵人。我們共濟著，您手建的仁慈方舟，就能拯救苦難的世界人們。…」（『南市青年』42 号，P. 5）

1.1.2. 国内動静解説

この期間，国内の動きについて誌面で特に強い記述がされているのが高雄事件（美麗島事件）である。43号は1月ほど前の3月に起き，前月4月軍事法廷の判決があったばかりのこの事件について，かなりのスペースを割いて解説している。

台湾国内で非常に大きな問題になり，治安当局への市民からの批判も小さくなかったこの事件について，明確に当局側に立って，反対派の意見を論難する，力の入った文章である。

人権重視の世界情勢を述べたあと，中華民國も憲法を含め人権を重視，尊重しているとし，米国でもリンカーンが南北戦争期に人身保護律を一時無効にしたり，第二次大戦中ルーズベルトが日系米人を隔離したりした例を上げ，国家安全上は必ずしもすべての人権が保障されるものではないことを言う。そして，世界人権宣言などで言われる政治犯とは，あくまで暴力を使用したり扇動したりする政治犯のことではなく，183名の憲兵警察に傷害を負わせた高雄暴力事件は，それ自体が人権に違反するものであって，その後の中華民國政府による関係者への対応は問題ないと強調している。(5)

こうした，国民党に対し批判が大きかった事件については，この後も「我們是十億大民族的國家～駁斥“台灣早已獨立論”」で，「中壢事件」「高雄事件」を演出して一部のものが国難の時に混乱させているとして，高雄事件審理での施明徳の供述を徹底的に批判している。

また，祖国統一に水差すような現状維持の意見については，

> 大陸同胞渇望建設一個三民主義的新中國，我們要億十億大國族之國民自居，

（5）　民國68年（1979）12月世界人権デーで起こった民衆と警官隊の衝突事件は野党関係者などが叛乱罪などで多数逮捕されたことで世界的にも報じられ，民國69年（1980）4月18日台湾警備総司令部軍事法廷で立法委員の黄信介に懲役14年，『美麗島』発行者の施明徳が無期懲役，姚嘉文，張俊宏，林義雄，呂秀蓮，陳菊らに懲役12年の判決が有り，内外の批判が高まっていて，たとえば23日には米国国務院の批判に政府が不満の表明を行うなど，中華民國政府は，事件処理の正当化に腐心していた。

不是一千七百萬之小國民。如此淒涼擴張五十倍，則必能化戾氣為祥和，在一片團結聲中，台獨謬論亦必化為烏有，此乃我中華兒女人人應有之胸襟與抱負。(6)

と述べている。このように，読者が政権の措置に納得できるようにする宣伝機能も果たしていた。

1.1.3. 中国関係（時事と文化）

米国と断交した中華民國に於いて，中国情報は青少年の意識喚起の為重視され，『南市青年』でも積極的に提供を続けている。

42号は中国で1月に行われた五中全會の解説が含まれる。その後も47号曹伯一の「匪情報導」は全人代の解説，48号は「中國大陸的信仰危機」と解説が行われる。匪情関連のクイズも設定されているが，これについては後述する。

発行元の救国団自体は，当然，時事研究会を企画し，民國69年3月末，政治大学国際関係研究センターの周玉山による「中共對台灣的態度」，『時報雑誌』副編集長耿榮水による「台灣面臨的政治挑戰」といったものが材料となる。10月には中國時報主筆卜大中による「中國問題的現在與未来」，11月は東呉大学の姜新立の講演「鄧小平路線與中國共產主義的未來」，11月文工委専任委員陳済民の「當前大陸情勢分析」などが行われ，或いは匪情研究会として民國69年4月10日から市内の学校で匪情座談会が反共義士呉寛厚を招き行われる。

祖国中国についての文化面の記事もある。42号の中国の黄河にまつわる話「洋人招乎」，あるいは，「國劇的欣賞」。後者は，若者に分からないと言われる國劇をテレビ局台視の國劇サークル代表王元富が解説したものである。特徴を解説した後，國劇の鑑賞自体は難しいものではないが，学校ではそうした授業が無いので，なるべく多く触れることが大切としている。

こうした情報報道・祖国文化の紹介はあるものの，かつて紙面や表紙を利用

（6）『南市青年』44号，P. 42

した，写真や絵による大陸風貌の紹介はほとんど無くなっている。

その一方で，地元である台南の文史紹介が為されている。42 号の五妃廟，43 号は大天后宮，史跡研究をしている楊蒼嵐教員による城隍爺解説。44 号は安平古堡と，同じ楊蒼嵐による台南の書院の話。45 号は虎頭埤，延平郡王祠。46 号阿公店水庫と，シリーズ化している。

1. 1. 4. 軍との協調

当時『南市青年』の実質的な発行元だった救国団は，各校の軍事訓練なども所掌していたように，軍との関係が深く，誌面でも重視している。

42 号では，台南市から軍校へ推薦されたのが 280 名であり，高校生で軍務に就き国家に尽くそうという者がこの数居ることを特記している。

44 号は『民族晩報』の記事紹介，「自強年談空軍自強中隊」がある。(7)

45 号林宗坤の「從竹園崗到中興莊」は台南一中から中正士官学校に進んだ者の長文原稿で，その行為を顕彰する狙いがある。入学のための検診を受けに行った病院で，一中の生徒がなぜ大学でなく軍校に行くのかさんざん不思議がられている件があることから，宣伝価値が大きいとされたのであろう。

1. 2. 文芸ー表現の固定化

『南市青年』の性格の一つが文芸投稿誌であることである。投稿ジャンルは散文，詩で，この時点では小説は入らない。自由題もあるが，號ごとに示されたテーマ，例えば「教師節」や「復興中華文化」といったものに沿ったもの，更には救国団の徴文に沿った優秀作なども含まれ，特にそうしたものは誌面でも前の方に置かれる。

例えば，49 号に掲載された中山國中の筆名「心霊」による「迎接開國七十年」の結びは懸賞文やスピーチコンテストで使い古された文言が並ぶ。

（7）『民族晩報』は民國 39 年（1950）発刊で，副刊『晩霞』も持っていた。現在は発行されていない。

…大陸上千萬萬的同胞正伸出手等著我們，我們要讓大陸同胞重回祖國的懷抱，他們嚮往自由民主的生活，已流露在各人的內心，我們要讓青天白日滿地紅的國旗，插滿中國大陸的各個角落，讓我們以必勝成的決心，熱烈的迎接中華民國開國七十年吧！[8]

台南一中の，筆名「猫」の「自強年一年記」は生活文ながら題材は軍訓であり，黄河や万里の長城のフィルムを見せられ涙する姿勢が描かれる。[9]

台南商工謝観閔の「給你我的中國」詩は先行の詩同様，校内外の作詩コンクールでいかにも選ばれそうな中国礼賛である。[10]

あるいは台南一中・趙善輝の「少年中國」は，各年代の中国への呼びかけを対にした構造の自由詩で，祖父や父母の年代はマイナスの状況が描かれるが，兄姉の呼びかけでは今後の再興への意欲が，そして，最後の自分は祖国のための奮闘を誓い，「我以你為傲，我要為你的萬丈光芒而奮鬥」と結ぶ。[11]

一定程度こうした内容や表現があることが，編集側，学校側の見る「良い作品」であろうという推定は，毎号の掲載作から投稿側には推測可能であり，それがまた似た傾向の作品を集める結果になっている。別の言い方をすれば，この傾向は，校刊のような，より小範囲の出版物にそもそも存在しているものであり，学校幹部が社務委員である『南市青年』のような地方青年誌もその延長線上にあるわけである。

1.3. 読者との互動

すでに40号近く発行を重ね，読者も國中入学時から読んでいる層になった。『南市青年』は読者と繋がる形態，企画をいろいろ模索しはじめる。勿論，文芸

（8）『南市青年』49号，P. 10

（9）「軍訓看大陸淪亡史，…長城的城堞，黄河的泥水，啊！　中國中國，我為你淚滿襟。」『南市青年』49号，P. 11

（10）「…祖國啊！　祖國。我將在躍馬中原　奪回失地。…先賢先哲啊！　我們是你們遺留下來的根。這不枯的根。我們不能再讓赤禍紅流蔓延下去。奮起啊！　朋友。…中國不會亡，中國將再富強。」（『南市青年』46号，P. 11）

（11）『南市青年』49号，P. 42

作品の募集・掲載は柱となっているが，他に幾つかのコーナーを始める。

1.3.1. 作品評や企画もの

『南市青年』はこのころは文芸の紹介だけでなく教育も意識していて，投稿作品講評コーナーが置かれている。なぜか途中で見えなくなってしまうのだが。評は文章の構成，内容，用語の適切さなどに及んでいる。ここで紙幅を割かれている作品が，当該号の前の方に掲載されていることは，編集方針を知る一つの手がかりとして良いだろう。

意欲的な試みとしては，「大家談」として“「慶祝」青年節 或「紀念」青年節”というテーマで討論的な文章掲載となったことがある。これは，家斉女中学生の，「青年節のもととなった事件が凄惨なものである以上“慶祝”という言葉は相応しくなく“紀念”とすべきではないかと言う提議により企画された。ここでは台南一中，台南二中，台南女中，家斉女中，台南護校，瀛海中学の生徒がそれぞれの考えを書いている。ただ，この形式，つまり一つの問題に意見を寄せ合う形は定期的に行われることなく，単発企画で終わってしまった。

1.3.2. 小投稿欄

所謂読者欄と言える「回聲谷」，採用分には稿料が支払われた。このコーナーは，理由は不明だが誌面で省略された号が有り，そのことへの不満の声も掲載されている。「回聲谷」での提案は，例えば毎号の記事として，成語故事の用法，文芸作品の評，国外を含む偉人伝（ニーチェ，バイロン，シュバイツァーなど），これにより『南市青年』は文学・科学・史地，生活，娯楽を含む理想的読み物になるとある。また 44 号に科学専欄ができたことを歓迎する意見が出されたり。編集部側から挿絵，イラストの募集も並行して行われた。

テーマ別にコメントを寄せる「大接龍」や，小噺コーナーもある。小噺コーナーは『幼獅少年』などにも同様のものがあり，読者には人気があったらしい。

また，課外読物の読書を奨励する目的で，『南市青年』編集部で感想文コンクール「課外讀物心得徴文比賽」を行うことが予告されている。

1.3.3. クイズ

読者は上記のような，言わば「小投稿」を行うほか，クイズに参加することもできた。懸賞付クイズには，３種類が見られる。

一つ目は，中華民国や中国共産党・時事問題のチェックをするもの，二つ目は，内容が頓智に類するもの，三つ目は一般的内容のものである。

まず，第一のものは，これまでの誌面でも置かれていたもので「時事匪情有奬徴答」としての問いが出されている。例えば42号の問題は以下の通りである。

1　民主鬥士，探索雑誌主編魏京生被KF法院判決五年有期徒刑。
2　鄧匪小平已宣布即將禁止偽憲中的「大鳴大放，大字報，大辯論」的權利。
3　汪匪東興造奢華之大房子，其費用可解決一千戸職工住房問題。
4　院長孫運璿等一行是應南非，馬拉威，賴索托，史瓦濟蘭等四國友邦之邀於二月九日往訪。
5　南非共和國不但擁有黄金，鑽石礦而且蘊藏大量之鈾，鉻，銅等戦略物質原料。
6　蘇俄對阿富汗之閃電入侵發生於去年十月二十六日。
7　總統勉全國青年「做天地間第一等事，為天地間第一等人」
8　今年四月五日是先總統　蔣公逝世四週年紀念日。
9　「青年子弟必須在德業上立志，向學術上爭勝，在行動上建功立業。」是先總統　蔣公的嘉言。
10　索忍尼辛說；共產主義任何民族實態都懷有敵意和具有破壞性。[12]

第二は「有奬猜謎」で，謎々のようなものである。例えば44号であれば「岳飛・曾参から学校名を答える」「乙から思う学校名」「綿々と続く砂浜から思いつく省都」「青でも赤でもない天下人」を答えるものである。[13]

第三は「有奬徴答」。問題は語句や数字を答えるものと，正誤で答えるもの（是非問）がある。

例えば，48 号は是非問形式で，「延平郡王祠は台南市府前路にある」とか「唐の明皇とは唐の太宗のことである」「台湾で最も高い山は阿里山である」などといった文章の正誤を答えるものであった。一方 47 号は，例えば「中華民國國歌の作曲者，作詞者は？」「わが国には省が幾つ，直轄市が幾つあるか？」「サウジアラビアは欧州か，アフリカか？」，「台南地裁は何路にあるか？　中山路にある裁判所は何か？」といったものであった。

一般知識問題が主で 42 号以降読者から問題を募集している。

1.3.4. 質問と応答

3.3 は読者が答えるものだが，逆に読者からの質問に答える「答客問」コーナーが企画された。一応質問対象を限る文言は見えないのであるが，例として

(12)　他号の問題も記録しておく。

43 号

1．美麗島高雄事件黃信介被判十二年有期徒刑。
2．政府調整消耗性油品價格平均漲一成左右。
3．中山大學在台復興明年將參加聯招。
4．我核能二廠因設備及施工方法新穎，引起各國注視。
5．共匪最近調動其黃海艦隊在防范蘇俄。
6．共匪在美大肆宣傳，並將長江三峽天然風景列為其建設結果。
7．來自大陸的傳聞，匪前廣州軍區司令員許世友槍擊鄧小平，許遭還擊受傷。
8．美國突襲伊朗解放人質行動已成功。
9．巴基斯坦表示將公開舉行核子試爆。
10．抗議卡特突破襲伊朗，美國國務卿范錫辭職，穆斯吉受命接替范錫職務。

44 号

1．卅年來，復興基地台灣由一個風雨飄搖，殘破不堪的社會，演變成今天繁榮進步，安定富庶。
2．宣稱「台灣獨立」就等於破壞國體，竊據國土，放棄對大陸之主權。
3．共匪卅年來，時刻想奪取台灣。
4．強固的革命領導中心，強大的國防和經濟力量是台灣安全的保障，也是反攻大陸的礎石。
5．大陸的形勢是共匪與人民的對立。
6．大陸同胞渴望建設一個三民主義的新中國。
7．韓國是我國的重要盟邦，現任總統是崔圭夏。
8．北韓認為要奪取韓國，最具短程效果的就是分化其內部團結。
9．政府決定今年年底將恢復公職人員選舉。
10．節約能源是為保障經濟，保護民生。

(13)　ちなみに，解答は「忠孝」「後甲」「長沙」「黄帝」(『南市青年』44 号，P. 1)

挙げられている質問はかなり偏っていて，政治・経済・国際情勢などに限られている。即ち，

蘇進軍阿富汗・伊全面反美對世局之影響為何？
我們常識；「粉碎共匪統戰陰謀。」請問「統戰」這個名詞的真義是什麼？
共匪對我們發動統戰攻勢，採用了什麼手段？
我們對共匪的「統戰」有沒有採取反擊的行動？
經常在報上看到「通貨膨脹」這個名詞，請問它的意義是什麼？
最近國內油價上漲以後，其他東西也跟著漲價，請問這是不是通貨膨脹？

また，49 号で張老師の筆名で「怎樣迎接聯考的挑戰」が掲載されたのがこの号である。(14) 張老師は，これから『南市青年』だけでなく，救国団系の青少年誌で長く続く質問応答コーナーになってゆくのだが，この号の「張老師的話」は，一種のカウンセリング系の文章で，何か問題を抱えていれば，台南市の場合何でも青少年輔導中心に相談にという事で，まだ連載物の体をなすものではない。

2　投稿と編集

2. 1.　編集方針

『南市青年』はどのように編集されていたのか。主編の劉希聖が誌上である程度示したものがある。(15)

ここでは，瘂弦が示した「計画編輯」の考えから，出版物は目標と効能を設定し，編集者は何らかの方法でこれを達成することが務めであるということで，『南市青年』の目標と効能について編集部で協議し，明示するに至ったと述べられている。

その結果，『南市青年』について，

(14)　『南市青年』49 号，P. 54
(15)　劉希聖「朝向一個理想的編輯観念」『南市青年』42 号，P. 61，62

目標：愛国心と情熱を持つ青年の養成

効能：青年に正確な知識を伝え，学習機会を提供する

ということが確認される。そして，この実現のための指導方針として，以下の7項目を挙げている。

①認識我們的國家
②認識台南市的歴史文化等
③擴展青年生活層面
④青年再學習環境中的行為指導
⑤青年們的創作發表
⑥創作指導
⑦趣味素材等

そして，編集者は，文章が長期目標のうち，当該期ごとの特徴を示せているか，読者はその文章を読むことを望んでいるかに注意せねばならないとしている。

編集の元になる記事・原稿については，文書，電話，対面により専門家や教師に依頼するものと，教師・学生の自主的投稿の二本柱で理想の誌面に近づける，としている。

こうした総括の上，より『南市青年』を楽しんでもらうべく，読者の意向調査の為に「回聲谷」を設けたとする。これにより，読者の考え，希望が編集者に届き，読者間の相互理解が促進でき，編集者も編集方針を読者全体に伝えられる。この3方向で「回聲谷」欄が機能すれば，読者，執筆者，編集者の間に団体意識が生まれてゆくという流れを想定している。

最後に，「読者の要求を満たす」のが編集の大原則だが，一方で「執筆者の要求を満たす」ことも重視する。また各号に掲載する編集部の作品評を示して，作品の水準を高めることに有用となる，と結んでいる。

ある意味編集の手順として目新しいものとは言えないが，ここで認識しておくべきことがいくつかある。

まず，その一つは，そもそもが聯合報副刊の編集長で，この時期は救国団系統の『幼獅文藝』の編集長であった瘂弦が期刊編輯人研修会で示した「計画編輯」の概念をきっかけに，その方向を『南市青年』編集部は持ち帰り，これに当てはめて編集方針を確認しているという事である。

つまり，中央で示される編集方針が，同じ救国団系の地方誌『南市青年』の編集に持ちこまれ，地方は地方で，この雑誌も参照しながら，より小範囲の青少年出版物が作られていくという一つの流れが見える。

二つ目は，指導方針として，誌面に様々な内容を含みながら，実際には多くの紙幅を割いている文芸に関しては，メインの位置ではなく，⑤や⑥という位置に置かれていることである。逆の言い方をするなら，文芸の体裁を取っていても，①のような内容を包含するものを投稿してもらい，それを掲載することを重視していることが分かる。もう少しくだけた調理や裁縫，あるいはユーモアコラムといった内容は，媒体を広めるための手段であって，雑誌に期待される機能は，国民意識を持った青少年の育成だったということになろう。

編集に関しては，『南市青年』では，「校刊編輯作者聯合討論會」を設定したほか，『南市青年』や各校校刊の文芸創作，編集のレベル向上のため，『南縣青年』の編集者と合同で，期刊編輯人員座談会を企画，この時司会は台南市寫作協會總幹事余鶴清が担当した。また青年文藝のレベル向上のため，作家紀剛を招いて，「鄉土文学問題的回思」と題する座談会を民國 69 年 5 月 18 日に行っている。[16]

このように，『南市青年』は各校校刊の編集者と緊密な関係を維持していることが分かる。

---

(16) 『南市青年』44 号，P. 64 の「團務工作誌要」では「紀綱」としているが，作品に『滾滾遼河』を挙げているので完全に誤植である。紀剛は本名趙玉山，民國 9 年（1920）大陸遼寧生まれの小説家で，『滾滾遼河』で中山小説文学奨受賞，座談会の 3 年前に連続テレビドラマにもなった。医師でもあり，長く台南で仕事をしていた。

2.2. 投稿者の事例

一方読者，特に創作して投稿行動を取る学生たちの意識はどうだったのであろうか。

鷹未揚の筆名で書かれた「投稿與我」は，この時代の青少年の投稿姿勢が知れるものとして興味深い。[17]

台南女中時代の彼女にとって，いつもの投稿先は，『青年戰士報』の「學府鱗爪」，『中央日報』の「中学生」，『台湾新生報』の「中学生」及び『南市青年』である。[18]『南市青年』に文章が載った時の回想で，学校で『南市青年』を開いて掲載されているのを知って興奮したとある。採用の通知は，発刊まで本人には来ないらしい。

大学進学後も「投稿迷」と友人にみなされているほど投稿を続けている。

そして『中國時報』「笑我人生」に採用され，「西洋通史」の教員がクラスでそのことを話題にするとその後同級生にいろいろ聞かれる事態に。稿料で奢るよう言われたが，稿料は200元だけなので，以後は投稿を匿名で行っていること。彼女自身は二種のペンネームを使用している。

一方同級生からは，なぜ『南市青年』や校刊に投稿するのか，有名な雑誌に投稿すれば良いのにと言われる，という声もある。[19]

このように，投稿者は多くの雑誌に並行して投稿を繰り返している。そして投稿先としては，校刊が最もレベルが低く，『南市青年』はわずかにそれに次ぐくらいの位置づけで，当然ながら全国的な出版物との差は意識されていたが，

---

(17)　『南市青年』49号，P. 42

(18)　『青年戰士報』は，もとの『軍民導報』で民國41年（1952）に国防部総政治部が創刊した新聞。当初は軍関係者のみ閲覧できたが，民國46年（1957）以降は，軍校への人材補給も考え青年をも読者に加えた。現在は国営唯一の新聞『青年日報』となり，国防部政治作戦局系列の青年日報社が発行機関になっている。『中央日報』は国民党報で中華民國政府が台北に移った民國38年（1949）からは台湾で発行された。この時期は台湾三大新聞の一つだった。現在は電子版のみ。「台湾新生報」は，もとは戦前日本人が発行していた「台湾（日日）新報」で，民國34年（1945）光復後台湾の行政長官公署宣伝委員会が接収して中国語版として発行を始めたもの。この時期は台湾省政府に移管されていたが，台湾省廃止により一旦国営化され，その後民営化されている。

(19)　『南市青年』45号，P. 61

反面，『南市青年』の採用数も限られている以上，たとえ『南市青年』でも十分に喜ばれ，誇りであったこと，それが文芸創作の継続への後押しになっている点は間違いない。

3 結　　語

これまでの検討から，次の事が言える。

第一に，民國 69～70 年時期にも，蔣家関連記事や中国関係･国内事件に関する政治的な部分は維持されている。しかし，その数は以前よりやや減っており，また時事匪情を銘打ったクイズは途中から，一般のクイズに変わってきており，雑誌の政治性の強さには変化の兆しが読み取れる。

第二に，この雑誌の編集が中央の文芸雑誌編集方針を意識して作られていること。例えば，中央の研修会から持ち帰り『南市青年』内部で検討した指導指針として示される①認識我們的國家には，時事問題記事が，②認識台南市的歴史文化等には，この時期シリーズ化された台南史跡の解説が，⑤青年們的創作發表は通常の徴稿が，⑥の創作指導は，各作品講評を掲載するようになったこと，創作に関する外部講師の講演を企画したこと，⑦趣味素材等には，刺繍や料理に関する記事が相当している。つまり中央の方針を意識して地方救国団雑誌『南市青年』が編集を行い，『南市青年』は校刊編集者と緊密に連携することで，間接的に中央方針は校刊に反映されていくという一つの系統が見て取れる。[20]

第三に，雑誌掲載を目指す投稿者は，『南市青年』のような地域的な雑誌であっても，一定の達成感を有していて，それは投稿数の確保に結び付く反面，採用されるために，望まれる内容・表現を忖度して画一的な創造行為に誘導してしまう危険を孕んでいて，掲載された一部の作品は明らかにその傾向を示している。

(20)　高等教育機関では民國 42 年（1953）中国青年写作協会の台湾大学分会が成立して以降師範大，成功大などに分会が置かれ，それは中央の文芸政策の一つの足場であったが，高校までの中等教育は救国団支部の文芸活動により，緩い統括が機能していたというべきかもしれない。

やがて時代は民主化の時代に進み，当然ながら期待される雑誌像は変化していくわけであるが，次にその時期の分析に進みたい。